

文系国語

現代文

問一

「漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。」という設問条件に対して、読みをひらがなで解答した受験者が多かった。もちろん、ひらがなの解答は、すべて不正解とした。

各設問では、b「苛烈」の読みを「シレッ」とする誤答が多かった。書きの設問では、a「枠」を「粹」とする誤答、h「巧妙」の「巧」が書けていない誤答が目立った。

問二

本文に書かれている具体的な内容を羅列しただけで、論理的構造に欠ける答案が目立った。この設問では、本文の抽象化された一文の論理構造に従って、それに肉付けするようにして具体化するというプロセスが必要であった。この設問のように、具体化を要求されている場合には、どのように論理性を構築するかを考えよう。

問三

一般化(抽象化)が要求されている設問にもかかわらず、具体的に解答している答案が多かった。また、一般化してはいるものの、論理構造がめっちゃくちゃな答案も目立った。一般化する場合には、必ず、答案の骨子を作成するべきである。そうすれば、論理構造が乱れることは少ないだろう。

問四

「人間は膨大な情報を処理しなければならず、情報を処理する負担を減らす必要があるから。」という答案の骨子を必須とした。しかし、この「膨大な情報を処理しなければならない」と「情報を処理する負担を減らす必要がある」を結びつける論理構造が曖昧なものが多かった。模範解答例では、単純に接続した文にしたが、例えば、「膨大な情報を処理しなければならない人間は、情報処理の負担を減らす必要があるから。」のような構造でも良かった。原因・理由の答案は、「～ため、～から。」のように、原因・理由の文脈が折り重なってしまい、骨子がつかみにくくなりがちであるので、注意が必要である。

問五

「有効性」と「ネガティブな側面」の対比構造にばかり気を取られてしまった答案が、非常に多かった。「対称性推論」が「非演繹的」とあるという文章内容に目を向けながら、その対比構造を生かしていない答案も目立った。この設問では、「論理的な結論が本質的には前提のなかにすでに含まれている」「演繹的推論」に対して、「非演繹的」とある「対称性推論」には「論理的な結論」が含まれていないゆえに、「発見的特性」がある、という論理構造を導き出せればよかった。ただただ本文の内容をなぞるのではなく、設問要求に従って、しっかりとした「説明」ができるように、練習を重ねよう。

問六

エを選んでしまう誤答が見られた。解答解説で示したように、エは、後半の部分が本文の内容に反している。時間を節約するためだったのかもしれないが、唯一の選択肢の設問であり、唯一の文章全体に関わる設問だったので、丁寧に考えるべきだった。

㊦ 古文

問一

現代語訳の設問は、単に古語を現代語に置き換える設問ではない。読解問題である。傍線部だけではなく、そこに至るまでの文脈を把握できているかどうかがかぎになる。今回の答案では、その、文脈把握のプロセスを経ていないと思われる答案が目立った。ただただ、傍線部だけを現代語に置き換えるべく四苦八苦していたのではないだろうか。それでは、仮に古語の知識があったとしても、正答にはたどり着けないだろう。現代語訳の設問の傍線部は、文脈の一部である。入試古文で問われる現代語訳問題は、傍線部周辺の文脈が問われているのだと理解してほしい。

(ア)「～がてに」「やすらひ(たまふ)」を訳出し切れていない答案が多かった。「ほととぎす鳴きて渡る」が、どのような状況でのことなのかを、前後の文脈から考えれば、もう少しは加点できたのではなかろうか。

(イ)「あてに」「らうたげなり」は、比較的、訳出できている答案が多かった。それに対して、「ねびにたれど、あくまで用意あり」の訳出は、壊滅的であった。傍線部の直前にある「女御の御けはひ」を考えれば、容姿、容貌についての表現であると理解できたのではなかろうか。「あてに」「らうたげなり」ができているだけに、とてももったいなかった。

(ウ)「なほ参りはべりぬべかりけり」を正確に解釈した答案は、ほとんどなかった。このような、敬語や助動詞が連続する表現には苦手意識があるのかもしれない。しかし、「なほ」「参りはべる」「～ぬべし」「～けり」と分解して考えれば、少しずつ理解できるようになるのではないだろうか。

問二

設問にある「作者による源氏の人物評」が、この文章の前半の内容に関するものだという意識に欠ける答案が多かった。そのような答案の多くは、単に二重傍線部をなぞるように解釈しただけの答案であった。説明問題は、設問をよく読み、何を説明するのかを考えるようにしよう。このような説明問題では、むしろ、詳細な解釈は不要である。文章の前半に書かれている、源氏のどのような気質が、相手にどのような影響を及ぼすのかを説明すべきであった。

問三

「橘の香をなつかしみ〈……を＋形容詞の語幹＋み〉」を原因・理由で解釈できていない答案が多かった。この語法は、和歌で頻繁に用いられるもので、出題率も高い。必ずマスターしておこう。

また、前書きにある「源氏は、亡くなった桐壺帝の女御であった麗景殿女御(女御)の邸を訪問することを思いつく」場面の結末にあたる和歌であるという意識に欠けている答案が目立った。さらに、すぐ後

に続いている傍線部（ウ）の、ほとんど解釈不要な「いにしへの忘れがたき慰め」の部分も大きなヒントになったのに、考慮していない答案も多かった。物語や日記などの文脈の一部として出てくる和歌は、その和歌だけに集中する狭い視点ではなく、文脈全体を捉える広い視点で解釈するようにしよう。

問四

正答率がとても低かった。名大では近年、この設問のような文学史に関する出題が続いている。最低でも中学学習レベルの文学史の設問には答えられるようにしておこう。今回の設問の（a）『竹取物語』は、中学学習レベル。それどころか、『竹取物語』が「物語の出で来はじめの祖」であることは、文化的な常識である。日本文学史を学習している、していないというレベルの話ではない。このようなサービス問題で得点できないようでは困る。

三 漢文

問一

b「於是（ここにおいて）」の正答率が低かった。これは、「以是(これをもつて)」,「是以(ここをもつて)」など、似た語法が多く、誤りやすい語法なので、この機会にマスターしておこう。

問二

「恭王は……呼び寄せた」「子反は……行かなかった」という主・述の関係が正確にとらえられていない答案が多かった。また、「辞スル」は、「恭王が呼び寄せたこと」に対するものなので、「辞退する」では結びつかない。漢文の現代語訳では、現代語の文としての整合性も考えあわせて解答しよう。

問三

(古文の問一と同様であるが、)現代語訳の設問は、単に漢文を現代語に置き換える設問ではない。読解問題である。傍線部だけではなく、そこに至るまでの文脈を把握できているかどうかがかぎになる。この設問では、傍線部が恭王の会話文の一部であり、「自分自身が戦いで傷ついていて、頼りとするのは司馬子反だけなのに……」に続く文脈にあることを、強く意識すべきであった。そうすれば、「司馬又此くのごとし」の「又」を見落とさず、「司馬もまた～」と、適切な現代語訳ができたのでないだろうか。「司馬は～」という答案が多かったが、これでは、現代語訳としての必須事項である、文脈意識に欠ける。

問四

非常に正答率が低かった。なかでも、「欲禍(禍せんと欲するに)」が正しく読めていない答案が多かった。(「禍」は「禍ひ」としても可。)この部分は、傍線部の直後の文「誠愛而欲快之也(誠に愛して之を快くせんと欲するなり)」が、傍線部と対になる表現であることに気づけば、簡単に読めただろう。書き下し文の設問も、現代語訳と同様、文脈意識が重要なのである。

問五

比較的、得点できていた答案が多かった。得点できていない答案は、「子反を喜ばせようと思ったことが、かえって、子反を害することになった」という、この文章の具体的事例に関する理解が不足していたように感じる。人物関係についての認識がゆがんでいる答案も多く見られた。登場人物については、しっかりと整理しながら、読解することを心がけよう。

問六

指定字数通りに、しっかりと記述しているにもかかわらず、得点できていない答案は、文または文章の論理構造が組み立てられていないものが多かった。150字以内という長文の記述では、論理構造が最も重要である。多くのことを盛り込もうと思っても、この字数では無理である。記述すべき内容の骨子(要点)を準備した上で、それをどのような論理構造によって示すかを考えることが、このような設問では肝要である。

論理構造を意識しないと、「何を言おうとしているのかわからない」答案になりがちである。最も「何を言おうとしているのかわからない」答案は、一文で150字を埋めている答案である。一つの文は、100字以内に収めるのが望ましい。長い文は、文法的な乱れが多くなりがちだからである。限られた時間内で記述しなければならない入試では、文末まで神経の行き届きやすい100字以内の文で書くのが適切なのである。また、一文が長くなると、単語・文節(連文節)の関係性が曖昧になりがちである。それでは、論理的な説明は不可能である。この設問の指定字数なら、最低でも二文に分けて記述するのが望ましい。

【採点基準】

□ 現代文

【共通基準】

1. 誤字・異字・脱字・衍字は1カ所につき1点減点。同じ漢字の誤りは1回のみ減点する。
2. 助詞誤りや主述関係の不備による「文のねじれ」がある場合は採点しない（全体不可）。
3. 字数制限
制限字数未満、もしくは超過している答案は採点しない（全体不可）。
文字・句読点同居によって制限を超えた場合も、字数超過とみなす（全体不可）。
4. 解答欄で最初のマスから書き始めているない場合は1点減点。
5. 「説明問題」の解答末尾に句点がない場合は1点減点。

問一 a～j 各2点×10=20点

問二 10点

・答案の骨子

「Aに対する違和感をきっかけにした、Bという仮説。」

が読み取れない場合は不可（=得点なし）。

※Aは、本文箇条書き①の内容。Bは、本文箇条書き②の内容。（解説参照）

・論理構造が曖昧な答案は5点減点。

問三 10点

・答案の骨子

「日常的な習慣にとらわれて、要因を限定してしまう誤り。」

が読み取れない場合は不可（=得点なし）。

・一般化した内容であること。（具体的説明を加えた解答の場合は8点減点）。

・論理構造が曖昧な答案は5点減点

問四 12点

・答案の骨子

「人間は膨大な情報を処理しなければならず、情報を処理する負担を減らす必要があるから。」

が読み取れない場合は不可（=得点なし）。

・論理構造が曖昧な答案は6点減点。

・「～から。」「～ため。」「～という理由で（対称性推論により）判断すると考えている。」のように「理由」を答える文末でない場合は6点減点。

問五 12点

・ 答案の骨子

「論理的な結論が用意されていないので、発見的特性があるという有効性がある。」
が読み取れない場合は不可（＝得点なし）。

- ・ 「ネガティブな側面」についての言及があること（抜けは10点減点）。
- ・ 論理構造が曖昧な答案は6点減点

問六 6点（順不同・完答）

古文

【共通基準】

1. 誤字・異字・脱字・衍字は1カ所につき1点減点。同じ漢字の誤りは1回のみ減点する。
2. 字数指定のない設問について、解答欄の枠をはみ出して記述している場合、
 - * 5文字以内のはみ出しは、許容として不問。通常通りに採点する。
 - * 6～10文字のはみ出しは、1点減点。
 - * 11文字以上はみ出している答案は、採点しない（＝得点なし）。なお、句読点、記号も字数に数える。
3. 「現代語訳問題」の解答末尾の句読点の有無は不問とする。
ただし、原文の末尾が読点なのに句点にしているもの、あるいは、原文の末尾が句点なのに読点にしてしまっているものは1点減点。
4. 「説明問題」の末尾に句点がないものは1点減点。
5. 「説明問題」において、文末表現が設問に対して適正でない場合は、採点しない（＝得点なし）。
6. 「説明問題」において、助詞が誤っており「文のねじれ」が生じているものや、文全体の意味が通らないものは採点しない（＝得点なし）。
7. 古文・漢文記述設問の解答のうち、「現代語の文法に従っていないと思われる」部分がある答案は、「現代語の文法に従っていないと思われる」部分について、一か所につき2点減点とする。

問一（ア） 10点

① 答案の骨子として、直訳の

遠慮されるが、通り過ぎることはできずにためらっていらっしゃるそのときに、
ほととぎすが鳴きながら飛んでいく

を基準とし、この内容で現代語訳していると判断できる場合には、基準点として4点を与える。

② ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていなければ、それぞれ個別に減点する。

- A 「つつまし」の解釈【1点減点】
- B 「……がてに」の解釈【1点減点】
- C 「やすらふ」の解釈【1点減点】

③ ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていれば、それぞれ個別に加点する。

A 「つつましけれど」「過ぎがてにやすらひたまふ」の主語【2点加点】

B 「つつましけれど」の具体化【2点加点】

C 「過ぎがてにやすらひたまふ」の修飾語（どこを）【2点加点】

問一（イ） 10点

①答案の骨子として、直訳の

年を取っているが、どこまでも気遣いが行き届いていて、

上品でいかにもかわいらしい様子である

を基準とし、この内容で現代語訳していると判断できる場合には、基準点として4点を与える。

② ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていなければ、それぞれ個別に減点する。

A 「ねぶ」の解釈【1点減点】

B 「あてなり」の解釈【1点減点】

C 「らうたし」の解釈【1点減点】

③ ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていれば、それぞれ個別に加点する。

A 「用意」の具体化【3点加点】

B 「あてにらうたげなり」の具体化【3点加点】

※「全体の主語（題目）→女御は」については、傍線部の直前にある語なので、なくても可。

問一（ウ） 10点

①答案の骨子として、直訳の

昔のことが忘れられないことの慰めのためには、やはり伺わなければならなかったのですね

を基準とし、この内容で現代語訳していると判断できる場合には、基準点として4点を与える。

② ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていなければ、それぞれ個別に減点する。

A 「(慰め)には」の解釈【1点減点】

B 「なほ」の解釈【1点減点】

C 「ぬべかりけり」の解釈【1点減点】

③ ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていれば、それぞれ個別に加点する。

A 「いにしへ」の具体化【2点加点】

B 「慰め」の具体化【2点加点】

C 「参り（はべり）」の具体化【2点加点】

問二 13点

①設問条件「源氏のどのような気質（が影響を及ぼすか）」について、答案の骨子として、

【どのような気質】＝年月を経ても女性に恋愛の情を向ける気質

を基準とし、この内容と同等の説明ができていれば、6点を与える。

②設問条件「相手にどのような影響を及ぼすか」について、答案の骨子として、

【どのような影響】＝再び恋愛の情を向けられて惑わされ、物思いの種になってしまう

を基準とし、この内容と同等の説明ができていれば、7点を与える。

- ③説明問題なので、表現については限定しない。骨子に示した内容が判断できれば、上記の得点を与えてよい。ただし、誤字・脱字、表現の不備については、適切に減点する。
- ④「源氏の気質が」を主語とした、適切な主・述関係による文であること。適切な主・述関係が成立していない場合は、上記の合計点から8点減点する。引ききれない場合は、得点なし。

問三 13点

①答案の骨子として、直訳の

橘の香りが懐かしいので、ほととぎすは、橘の花が散る里を探して訪れたのですを基準とし、この内容で現代語訳していると判断できる場合には、基準点として4点を与える。この骨子とかけ離れている場合は、採点しない(=得点なし)。

例・文末が疑問・反語になっているような場合。

② ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていなければ、減点する。

A「橘の香をなつかしみ〈……を+形容詞の語幹+み〉」の解釈【2点減点】

③ ①の基準点に対して、以下の項目が達成されていれば、それぞれ個別に加点する。

A「橘の香」の具体化【3点加点】

B「ほととぎす」の比喩表現としての理解【3点加点】

C「花散る里」の具体化【3点加点】

問四 各3点×3=9点

漢文

【共通基準】

1. 誤字・異字・脱字・衍字は1カ所につき1点減点。同じ漢字の誤りは1回のみ減点する。
2. 字数指定のない設問について、解答欄の枠をはみ出して記述している場合、
 - * 5文字以内のはみ出しは、許容として不問。通常通りに採点する。
 - * 6～10文字のはみ出しは、1点減点。
 - * 11文字以上はみ出している答案は、採点しない(=得点なし)。なお、句読点、記号も字数に数える。
3. 「現代語訳問題」の解答末尾の句読点の有無は不問とする。ただし、原文の末尾が読点なのに句点にしているもの、あるいは、原文の末尾が句点なのに読点にしているものは1点減点。
4. 「書き下し文問題」の解答末尾の句読点の有無は不問とする。ただし、原文の末尾が読点なのに句点にしているもの、あるいは、原文の末尾が句点なのに読点にしているものは1点減点。
5. 「説明問題」の解答末尾に句点がない場合は1点減点。
6. 「説明問題」において、文末表現が設問に対して適正でない場合は、採点しない(=得点なし)。

7. 「説明問題」において、助詞が誤っており「文のねじれ」が生じているものや、文全体の意味が通らないものは採点しない（＝得点なし）。
8. 古文・漢文記述設問の解答のうち、「現代語の文法に従っていないと思われる」部分がある
答えは、「現代語の文法に従っていないと思われる」部分について、一か所につき2点減点とする。

問一 a～c 各4点×3=12点

問二 8点

- ①前半「使人召司馬子反、」の部分を「A（＝人）にB（＝召）させる」という構文に、後半「辞以心痛」の部分を「B（＝心痛）によってA（＝辞）する」という構文に従って解釈できていなければ不可（＝得点なし）。
- ②前半「召」の主語である「恭王」、後半「辞」の主語である「子反」のいずれかについて、答案内に全く示されていないか、誤っているものは不可（＝得点なし）。

問三 8点

- ①「而」を逆接の接続詞として解釈できていなければ不可（＝得点なし）。
- ②「此」が指し示すものを具体的に説明して現代語訳していなければ不可（＝得点なし）。
- ③「此」が指し示すものの骨子は、
酒に酔って寝てしまっている
とする。この内容に準じていけばよい。

問四 7点

- ①原文の返り点に従った順序を取り違えたり、欠落したりしている答えは、採点しない（＝得点なし）。
- ②「子反」「禍」「欲」「非」を1つでもひらがなにしているものは不可（＝得点なし）。
- ③「也」を漢字のままにしているものは不可（＝得点なし）。
- ④動詞「禍」（わざわひす）の送り仮名「ひ」の処理は、「禍せんと欲するに…」でも、「禍ひせんと欲するに…」でも可。
- ⑤「禍せんと」は「禍せんことを」でも可。それ以外は不可（＝得点なし）。
- ⑥「子反に」は、助詞「に」を伴わないものは不可（＝得点なし）。
- ⑦「欲するに」は、「欲する」「欲すること」は可。「欲すに」は、不可（＝得点なし）。

問五 10点

- ①答案の骨子としては、
【利せんと欲し】たことによって、かえって【害する】ことになったということ。
を基本とする。この骨子の意図が読み取れれば、表現はこの通りでなくてもよい。
「【利せんと欲し】たこと」、「【害する】こと」の内容は、解説参照。
- ②「【利せんと欲し】たこと」、「【害する】こと」のいずれかが誤っている場合は、5点減点

問六 20点

- ①最低字数は、130字とする。これに満たない答案は、不可（＝得点なし）。
- ②【衆人の行動の特質】と【聖人の行動の特質】を比較していない答案は、不可（＝得点なし）。
- ③【衆人の行動の特質】しか書いていない答案、あるいは【聖人の行動の特質】しか書いていない答案は不可（＝得点なし）。